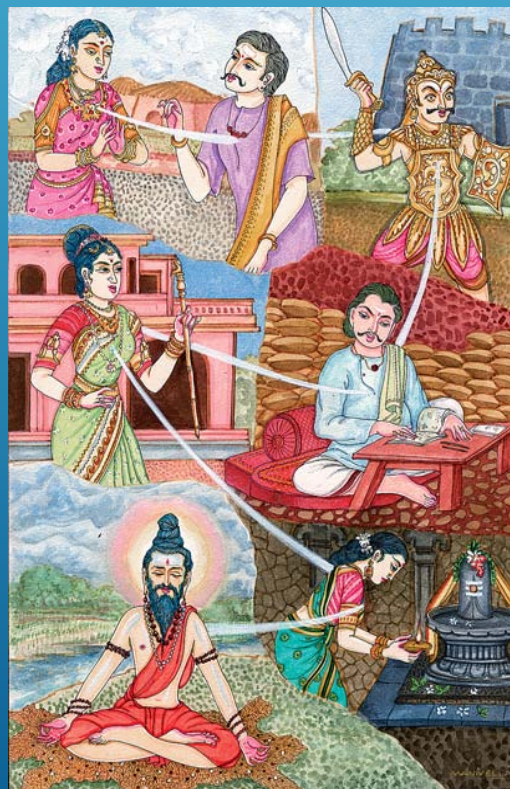


近年の北米心理学における宗教研究の現状と課題

ムスリン・イーリヤ（日本大学）



本研究の概要（１）

本研究は近年の北米心理学理論における死と宗教についての研究である。

アメリカ合衆国を中心に、主として、ここ35年あまりの北米心理学においてなされた死と宗教の関係に関する学術研究を対象とする。

より具体的には、米国などの宗教心理学者の間で、死体・死者・死後の生の継続や再生・他界など、死に関する信仰と個人や社会における死に対する態度の関係、宗教者の死に対する認識と死の儀礼との繋がり、とりわけ宗教の成立過程における死の位置、死関連の信仰が宗教の存続と維持において果たす役割などといった問題はどのように検討されてきたのかを分析することを目的としている。

すなわち、本研究の基本的な関心は、宗教全般の存在理由、宗教の最重要機能、主たる魅力や特徴及び宗教全般の未来についての議論の中で死が占める位置や意味にある。したがって、本研究は、宗教全般の成立や発生、機能や働き、維持や存続における死の位置・役割という概念的な次元に関する大きな理論的な問題に注目する研究として位置付けられる。

本研究の概要（２）

本研究で「近年」とは1980年代初頭以降の時代を指している。1980年代初頭から1990年代初頭にかけて、**恐怖管理理論**、**宗教の合理的選択理論**、**宗教の愛着理論**、**進化心理学**による宗教論など、現在においても研究が進展する幅広い体系的な宗教理論や理論的枠組みが複数登場する。

R. A. エモンズとR. F. パルチアンが述べる通り、1980年代は、宗教心理学の理論、方法、歴史と現代における展開を対象とした重要な著作が幾つも現れ、新しい専門誌が創設されるなど、専門書の出版数という点でもアメリカ合衆国の宗教心理学研究が急激に拡大し、盛になった時期でもある⁽¹⁾。

本研究が対象とするのは、上述の諸理論に（恐怖理論への反発が発足の基礎となった）**意味管理理論**を加えた、**五つの理論**である。その理由としては、最近に至っても活発な研究活動の中で死関連の問題を取り上げ、宗教研究に大きな影響を与えている理論であること（北米心理学の専門誌と論文集において発表された学術論文の数や刊行の頻度が高く、他理論にも刺激を与えていること）、論争あるいは相互補完という形で互いに関係していること、また最近の北米における宗教心理学研究の全体像を把握する上で欠かせない理論的視点であり、その研究の方法・対象・動向の多様性と幅広さを示すために有用な理論であることが挙げられる。

(1) Emmons, R. A. and Paloutzian, 2003, pp. 377-402.

本発表の主な目的

本発表の**主な目的**は、本研究が対象としている諸理論の宗教概念と死の捉え方を取り上げながら、**近年の北米心理学における宗教研究の問題点、あるいは課題を指摘すること**である。より具体的に、**焦点は自文化中心主義的傾向**（例：「宗教」（全般）イコール一神教；「神」イコール完全に善意な愛の存在；「死後の世界」イコール理想的で完璧な世界、など）や**神学的な、イデオロギー的要素の指摘に置かれる**。



Thomas A. Pyszczynski
(恐怖管理理論)



Rodney Stark
(宗教の合理的選択理論)



P.T.P. Wong
(意味管理理論)



Lee A. Kirkpatrick
(愛着理論)



Leda Cosmides
(進化心理学)

恐怖管理理論 (Terror Management Theory)における宗教と死 (1)

恐怖管理理論によると、宗教など、すべての文化的世界観は、（国家や宗教団体のような）永遠とされる象徴的現実世界の中に個人を価値ある貢献者として位置づけ、それによって個人に「象徴的な不死」を与える。ただ、**宗教が世俗的な世界観とは異なる点は、宗教が特に強い安心感を与えてくれるような文字通りの不死を約束することである**⁽¹⁾。

「世俗的と宗教的信念には類似点があるとはいえ、**宗教的世界観はほかにない強力な存在的な安心感を提供する**。まさしく、**死の恐怖への解毒剤**といえ、**宗教ほどのものはないだろう**」⁽²⁾。加えて、TMTの議論を信仰と死の不安に関する調査の理論的な出発点としたヨナスとフィシャーは次のように述べている。「恐怖管理理論によると、すべての文化的世界観は死の恐怖の管理を手助けするが、大抵の宗教でその中心を成すのは死を超越する信仰であるから、来世への信仰を勧めることによって**死の恐怖を和らげるという点は、宗教の中心的な機能**だと言えるだろう」⁽³⁾。またグリーンバーグ他も、**字義通りの不死を約束していることは「疑いもなくほとんどすべての宗教の主な魅力である**」と述べている。

(1)Greenberg, J. et al., 1990; pp. 308-318など。(2)Vail III et al., 2010, p. 85.

(3)Jonas and Fischer, 2006, p. 554. (4)Pyszczynski, Solomon and Greenberg, 2006/2003, p.20.

恐怖管理理論における宗教と死（2）

TMT論者は、「**諸宗教は、自然世界に変化をもたらす能力を持つ超自然的エンティティの存在を想定する信念体系**であり、典型的に、死後の世界への門番としての機能を果たすものである」（1）と述べ、自らのアプローチを「**宗教信仰を、粘り強く、かつ浸透している死の問題の解決**として捉える伝統を受け継いでいる」（2）ものと位置付ける。

そして宗教が、人間の置かれている世界を説明し、不確実な運命や天災など自力でコントロールできない出来事に対する有能感や統制感、社会的連帯感などを与えるように機能していることを認めつつ、「**宗教信仰のとりわけ重要な機能とは、人間の死に対する意識に由来する潜在的に圧倒的な大恐怖を抑えることである**」と主張し、宗教が、「**心理的な安心感と不死への希望を持たせることで人間独自の死の意識に由来する潜在の大恐怖を管理する**ように働いている」と強調する（3）。

（1） Vail III et al., op.cit, 2010, p.84.

（2） ibid, p. 85.

（3） ibid, p. 84.

意味管理理論(Meaning Management Theory)における宗教と死(1)

MMTの主要提出者P.T.P.ウォングの議論では、宗教を意味源泉として捉えた書物や宗教の精神健康へのポジティブな効果を示した調査が多数挙げられ、宗教が大きな意味の源泉で、禍や実存的な問題への効果的な対処戦略として高く評価される。何故なら、**宗教は人々に究極の意味を与えることによって、苦しみなどの特定の出来事や状況の意味付けを可能にするほか、自尊心やアイデンティティを養う機会、他者との団結感や親近感をも提供するため、悩みや不安の克服・緩衝に繋がるためである。**また重病や大切な他者の喪失に対する効果的な対処法を提示することによって、**高齢者・終末期患者・遺族などをより良い精神的な健康と充実した生活へ導くことができる。**

そのような宗教は、**犯罪やアルコール中毒、麻薬依存症、性病の予防にも資するため、国家の犯罪防止と医療への出費を抑えるなど、国家と社会にとって経済的にも有用となる。**ウォングは、国家は宗教に対する考え方を換え、宗教の精神的・肉体的健康への効果に関する研究を金銭的に支援し、**高齢者の精神ケアなどの分野における政府機関と宗教団体の協力を推進すべきだとも述べている。**

意味管理理論における宗教と死（2）

ウォングは宗教に「人間存在における中心的な役割」を認めながら、次のように述べる。「個人の中には**全ての人の（心の）深いところには聖なるもの、超越的なものとの繋がりへの憧れがある**、孤児のように親・自分の運命・家を求めることを促す空虚感と不安がある。人々は、例えその意識がなくても、自信と勇気を持って未知と向き合うことができるように**必死かつ密かに**（単数形、大文字の）**神を信じたがっている**のである」。

このようにウォングは、V. フランクフルに類似した形で自己超越性や唯一神を中心とするを中心とした**無意識で普遍的な宗教心・宗教性を想定する**。そして、宗教の普遍性や重要性を裏付ける見解としてキリスト教神学者の見方を引用する。「神の姿に似せて作られた人間の人生全体は創造主への奉仕を反映しなければならない。人間は自らの神への奉仕の外に存在し得ず、人は、真の神に仕えるにしても、偶像あるいは自らに仕えるにしても、仕える以外は道がない。**宗教は人間を定義し、宗教こそ人間創造の理由**であり、人間の満たすべき目的である」(1)。

(1) Wong, 1998, pp. 361-362.

意味管理理論における宗教と死（3）

恐怖管理理論が重視する死の否認のような死に対する回避型態度のほかに、死と向き合う姿勢、つまり死の受容という態度も有り得るとウォングは強調する。特定の条件の中で死を受け入れようとする考え方が個人の主要な動機になる得る場合もあり、それを示す臨床的・実証的証拠は増えているとする。**死に対する態度を一義的に回避として捉える恐怖管理理論とは異なり、意味管理理論は死の受容も考慮に入れるわけである。**

意味管理理論が関心を寄せる**死の受容**は、次のように区分される。1) 来世を現世より良い世界として見なす信仰を持つ人に見られるような、死を前向きに捉え、積極的に歓迎する態度（**接近型受容**）、2) 死を、生と死からなる自然な周期の一部として受け入れる態度（**中立型受容**）、3) 生が苦痛に満ちていると捉え、死をそうした苦痛からの解放と見なして受け入れる態度（**逃避型受容**）の三つである⁽¹⁾。

(1) Wong, P. T. P., 2010a, pp.73-82 及び Wong, P. T. P., Reker, G. T. and Gesser, G., 1994.

意味管理理論における宗教と死（4）：

宗教信仰（キリスト教的な世界観）の優越性

ウォングは、積極的な自己実現によって得られる人生に対する充実感と達成感がもつ死の不安に対する緩和機能に注目したL. M. グッドマンの議論を受け入れ、恐怖管理理論が自己実現を無視しているといった批判を展開する。だがその一方で、自己実現、あるいは自己の潜在能力の実現を強調する立場の限界にも触れている。自己実現こそ死に対する最善の対処法であるというグッドマンの見方は、一部の人々が早期の死によって自らの人生の任務・使命を果たすことなく、潜在能力を発揮できないまま亡くなる点を見落としている。加えて、この見方は死後に対する希望を持ち合わせていない。ウォングが主張するには、**死へのアプローチとして最大限の満足をもたらすのは、自己の生前の使命のみならず、報いのある死後の生も、つまり再生と永遠の命をも想定する接近型受容の態度**である。生の意味感のみならず、死の意味感とも相関関係を持つ点でも、**接近型態度は死への最良の態度であり、「宗教に基づいた死の受容」は死に対する「勝利の精神」を備える**という。レーカーとウォングは、その初期の論文においても、宗教信仰を持つ高齢者が、信仰を持たない高齢者と比して、死への恐怖が少ないという結果を示した先行研究に基づき、**「不死、天国の存在と究極の意味を含む宗教的信仰は、死の不安に対する効果的な解毒剤である」と述べる。**

(1) Goodman, 1981参照。(2) Wong, 2000, p. 31. (3) Reker and Wong, 1988, p. 233.

宗教の合理的選択理論 (1)

宗教の合理的選択理論は、そのすべての主要な著作の中で普遍的な不死への欲求を想定し、宗教にその欲求を満たす機能があることを理論の出発点とする。また、不死の約束は宗教の最大の機能であり、再生に関する説明や約束の提供が全般的な宗教の大きな魅力であって、その存続の理由、そして個々の教団の社会における成功の要因であると考えられる⁽¹⁾。そこで不死は人間の何より望むものと見なされ、宗教は永遠の命を提供することでその欲求を満たし、慰めや希望を与えるものとして把握される。

しかし、こうした見方の背景には、魂や身体の死後の状態が良く、死者が我々にとって再会するのが望ましい身近なものであり、死後の世界は（道徳的に振舞いさえすれば）報いのある快適な場所であるという大前提がある。だがこれは、多くの宗教で、現世と来世が特定の道徳的な秩序のない世界、死体や死者が汚らしいもの、死霊が怒りに満ちた不運な存在、また個々の死者の霊魂が他と識別不可能な（いわば、人格なしの）漠然とした存在として考えられていることを軽視している。

(1) 「永遠の命はおそらく人間の最も至急の欲求であろう」 (Stark and Bainbridge, 1985, p. 6)。「すべての社会は何らかの代償物を利用する。最も普遍的であろう代償物は不死への約束である」 (Stark and Bainbridge, 1996/1987, p. 37)。

宗教の合理的選択理論 (2)

アメリカの宗教社会学者R. スタークとその同僚が提示する合理的選択理論では、確かに自らの宗教論を展開する学術論文においては、神学的な視点が直接持ち出されることはないが、キリスト教や右派的な政治観に対する感情的な執着や非学問的な理由による歪みが散見される。例えば、人間関係や自然に聖性を見出した無神論的な靈性に宗教的な要素を認めようとする動向を「学生たちの頭から超自然的なものに対する信仰を消し去る」ような「攻撃的な無神論」の活動として辛辣に非難し、イエスを「単なる偉大な道徳の教師」として捉えた見方に反発したり、アメリカに入ってきた海外の宗教団体を多く取り上げる当時のアメリカの宗教学を「つまらなくて変わった」、「エキゾチックな」ものに過剰な興味を示す「リベラリストの研究」として批判する。既存のキリスト教が弁護される一方、外国の新宗教が研究対象として評価されない点については、学問的な基準としての客観性や平等な扱いが担保されているとは考えがたい（中心的な論者であるスタークは、一般の読者を念頭に置いたその著作の中で、中世時代の十字軍の活躍を正当化するなど、明確なキリスト教の弁護を行っている）。つまり、合理的選択理論においては個人的な宗教的な動機による規範が見受けられ、それは、あたかも宗教学の対象を有神論、そして特に一神教とアメリカ国内の宗教団体（つまり、論者が擁護するキリスト教）の研究に制限したいかのような発言に見られる。

愛着理論 (Attachment Theory) : 愛の存在としての神 (1)

愛着理論では、安定型の人には神を、面倒を見てくれる許しや愛の存在として見なす傾向がある一方、不安・両価型は罰を与え、怒りうる存在として、回避型は直接生活に関わらない遠い存在としてみなす傾向を持つとされる。そしてその論者は、神を愛の存在として捉える人は、人生に対する満足感が比較的大きく、不安症や鬱病になることも少ないため、神経症にも比較的なりやすい不安定型の信者よりも、その精神的・肉体的健康が良好であると主張する⁽¹⁾。しかし、この種の重層的な議論、また愛着対象（神）との分離に対する不安を取り上げる議論は十分に展開されているとはいえない。そこで強調されるのは、神が無条件の愛を提供する存在として、いかに信者に不安緩和や慰めを与え、いかに信者を良好な健康状態にするかといった、神が持つ安全避難所としての（ポジティブな）機能ばかりである。AT論者においては、**宗教の多様性をよく承知していると言いながらも、「その（神との）関係において経験される情緒的な絆とは、子供と養育者の関係における愛着に類似するある種の愛であり」、「神像は敏感な養育者の特徴に類似することが多い」**⁽²⁾、「**愛は宗教的信念体系、そして特に人々の神との関係の感覚において中心的な感情である**」⁽³⁾といった言及に見られるように、神を完全に善意な愛の存在として一義的に捉えがちな現代アメリカ的な見方をそのまま無反省に取り入れてしまっており、文化的な差異と歴史的な神観念の変容を軽視した姿勢が時に見受けられる。

(1) Kirkpatrick and Shaver, 1992; Kirkpatrick and Rowatt, 2002. (2) Granqvist and Kirkpatrick, 2008, pp. 908-909. (3) ibid., p. 907.

愛着理論 (Attachment Theory) : 理想的な愛着対象者としての神 (2)

宗教の愛着理論では、神（唯一神）は「理想的な」、「高められた」愛着対象者として捉えられ、理論の有効な範囲あるいは対象として特に人格神の説明が挙げられている。だが、魔・鬼・悪霊、邪悪な魔女など、愛やケアを一切提供しない超自然的存在について、ATの観点からはどのように説明できるだろうか。それらの存在が愛着対象者でないとしても、そうした宗教観念が何故存在し、それを信奉する人が何故存在するのかという問題は解決されない。また、愛の神のような、安全な避難所として機能する愛着対象者を中心に据えた宗教においても、上記のような存在が教えに組み込まれている（認知的・感情的）理由を説明する必要があるだろう。人間にとって安全な避難所として機能しない、脅迫的で邪悪な超自然的な存在が、愛着対象者になりえず、そうした存在との関係が愛着関係で説明し得ないなら、愛着理論はすべての人格神への信仰とその関係を説明しておらず、（論者が適用範囲として控えめに指定した説明対象）「人格神との関係を中心とした宗教」も完全に捉え切れていないということになる。**宗教の愛着理論は、悪魔や悪霊などの愛着対象者でない存在、あるいはマナのような人格神でない信仰対象との関係を説明できないほか、愛を宗教の中心的な感情とし、愛の神に最大の関心を向けるが故に、人格神のすべての側面を捉え切れず、宗教的な理由による悩みや動揺、また宗教の精神的健康への有害な影響といった側面も考慮されない。**そのため、近年見られる理論の有効範囲を拡張する努力にもかかわらず、その射程は狭く、提唱者による「様々な宗教の側面を理解するための力強い枠組み」という評価についても疑問の余地が残る。

愛着理論(3):宗教による精神的な健康へのポジティブな影響の強調

また、愛着関係は必ず愛を意味し、宗教信仰の対象となる存在が究極の愛着対象者であると主張する愛着理論においても、愛着対象となる神との関係がもたらす精神健康へのポジティブな影響が繰り返し指摘される。愛着理論の提唱者は、精神健康と宗教の間関係は複雑であるとも述べているが、最終的には、良好な影響を特定した調査のみが参照され、宗教信仰による怒り、絶望、鬱などを検討した調査が取り上げられることはない。

こうしたバイアスの理由はこの理論の内在的な矛盾や狭い宗教概念にあると考えられるだろう。というのは、**愛着関係を人格神型有神論の説明に活かすなら、愛着論者が主張するように、神あるいは神々、天使などは、愛情や安心感、安全感の提供者であり、「究極の」、「理想的な」愛着対象者でなければならない。**しかし、このような属性を持たない神も信仰されていることは事実であり、その事実を認めれば、愛着理論の宗教への応用が重大な疑問に晒されるか、応用の範囲がかなり制限されるはずである。この打撃を回避したいが故に、宗教の愛着理論を唱える論者たちは愛、安心感、慰め、不安緩衝という宗教の一側面を強調したがるのではないか。そして、そのような宗教還元をしてもよいという彼らの立場を容易にするのは、米国などの西洋諸国に見られる、神を愛の存在として捉える現代の傾向であると考えられるだろう。

本研究の指摘（１）

死の捉え方について

本研究が対象とした心理学研究は、死の不安・恐怖の働きと精神・行動への影響（恐怖管理理論）、死の意味と生、生き方への影響（意味管理理論）、不死への欲求（合理的選択理論）、死別の精神的な影響と悲嘆の過程（愛着理論）、死体や死者に対する認知的反応、不死の魂への信仰の認知的な基盤（進化心理学）といった、死の様々な側面を検討し、既に述べたように、それぞれ貴重な洞察や見解も提示する。

しかしながら、以下述べるように、各理論の死と宗教の関係の捉え方にはいくつかの問題点が見られる。

全体的としては、本研究で扱った心理学研究では、宗教における死の様々な側面が検討されているが、**理論ごとに見てみると、（死が多面的な現象であるにもかかわらず）死及び死関連の現象の捉え方はそれぞれ限られており、宗教と死という主題について、一義的な偏った見方を提供する傾向がある。**

本研究の指摘（２）

死の捉え方について

例えば、生存と生殖という点で重要な、具体的な適応問題に対応する認知的力ニズムに注目した進化心理学のアプローチは、死体や死者に対する認知的反応を説明し得る。だが、死の不安の多面性、死が人間の生き方にもたらす具体的な影響、死についての宗教思想などを考慮しておらず、宗教における死の位置や機能についての説明としては、全体的に不十分であると言える。

また、宗教の愛着理論では、愛着対象者との死別によって生じる苦痛や悲哀とそれへの対処法における個人差を愛着様式で説明しようとし、こうした悲嘆を宗教における来世への信仰と結びつけて考えられているほか、密接な愛着関係による、死の不安への緩和効果が証明される。ただし、自己の他者との関係において死を検討するアプローチは貴重であるが、死の意味または達成感と死の不安、あるいは信仰の危機と信仰による死の不安の増加などといった要素は取り上げられておらず、死についての全体的な理解としては部分的な成果に留まっていると言わざるを得ない。

本研究の指摘（3）

宗教信仰と死に対する態度の関係について

恐怖管理理論や意味管理理論、宗教の合理的選択理論に関しては、来世を究極の報いが待つ場所として、死者を再会が望ましい身近な存在として見なすような、有神論に近寄った宗教概念が理論的な背景に散見され、死者と来世に関するほかの信仰に関心が及ぶことは少ない。

確かに、多くの人は自己あるいは大切な他者の死に対する不安や意識的・無意識的な不死への願望から宗教に傾倒し、宗教教理と実践の一部が死の不安を緩和するように機能するだろう。だが、**信者の心の中に死の不安を引き起したり、高めたりする宗教教義も存在することは考慮されるべきである。**より具体的には、**来世での処罰や悪死霊の存在の想定などに由来する宗教特有といえる不安を引き起こす内容が存在し、**キリスト教、仏教、神道の伝統にも見られるように、積極的に厳密な宗教実践を促すために**死後の運命の不確実性、死の恐ろしさ、あるいは死体の腐敗や穢れを意図的に強調することで信奉者の中に死関係の不安を組織的に高めようとする宗教があることを見逃すべきではない**だろう。

本研究の指摘（４）

宗教信仰と死に対する態度の関係について

宗教の中に死への不安を煽る効果を認めたり、死に対する態度と宗教信仰の間に明確な相関関係が確認されない実証研究については、十分に参照することなく、あるいは反論しないまま、宗教と死の関係についての一義的な一般論に陥りやすい傾向がある。つまり、反対の証拠もあるにもかかわらず、例えば、恐怖管理理論は、もっぱら死の恐怖の緩衝を宗教の中心的機能として捉え、合理的選択理論は、宗教が永遠の命の約束を提供することによって普遍的とされる不死への欲求を満たすものであると主張し続ける。

さらに、恐怖管理理論に関しては、理論的考察のレベルにおいても、研究調査の実践的なレベルにおいても、死の不安・恐怖と死の否認にまずもって議論が集中しており、他の死に対する態度に関心は向いていないようである。

また、死の不安に限らず、恐怖感管理理論・意味管理理論・合理的選択理論・愛着理論では、宗教的な理由による悩みや動揺、また宗教の精神的健康への有害な影響といった側面も考慮されない。

結論 (1) : 神学的心理学と無神論的心理学及びその間

本研究が取り上げた北米心理学においては、普遍的な心理を想定しながら、単なる宗教の記述や解釈を超える、宗教現象の原因や宗教者の動機の説明を目指す試みが見られる一方、情緒を強調する主情主義的な姿勢とそれに反対する動きが存在し、人間観の相違も関わってくる宗教の独自性と特有の本質、宗教の進化論的な適応性と先天性をめぐる対立が認められると言えるだろう。

この対立は、基本的に、信仰を持っているようである学者による、**神学的な要素を踏んだ宗教的心理学**（意味管理理論）と**信仰を持たないようである研究者による、実質的な無神論の要素を含んだ心理学**（進化心理学）の間の溝を反映している。神学的心理学と実質無神論的心理学が形成する二つの対極の間に、方法論的な無神論に見える立場から宗教を心理的現象として厳格な学術方法で研究しようとするが信仰の真偽に関する発言を控える（実質的な無神論の極に比較的に近い）愛着理論や恐怖管理理論と、宗教信仰を擁護しながらその研究において厳格な学問的な方法を使用することを志向するようである（宗教的心理学の極に比較的に近い）合理的選択理論である。

結論（２）：改善すべき点

進化心理学を除いて、これらの理論では、宗教は死の不安の緩衝・解毒剤・最良な保護などと、一義的に捉えられ、宗教者の死後への不安、死後の処罰や地獄に関する信仰、及び、名もない存在ないし生者を脅かす脅威しての死者（の霊）への信仰などが考察の対象から完全に除外されるか、十分考慮されないため、宗教における死の捉え方が限定的であり、自文化中心的であると見てよかろう。

そのため、宗教と死の問題に関するこれらの研究には、今後の課題や将来的な見通しを考えるならば、以下の諸点が求められるだろう。宗教信仰や実践の多様性と多面性をより強く意識すること。自らの立場の自文化中心的傾向やイデオロギー的な傾向をより自覚し、宗教の理論を提示するに当たっては、自らの主観的な宗教的・政治的な嗜好を可能な限り排除し、他学派の見解に十分配慮すること。信者の死に対する態度について論じる場合、可能な限り心理学的な実証研究を参考にしながら、自らの主張と異なる成果を発表した調査にも真摯に向き合い、説得力のある形で反証、反論すること。死体や死者に対する認知的な反応、死への不安・恐怖、あるいは大切な他者との分離とその悲嘆というように、ひとつの死の次元に議論を限定することなく、死の問題の多面性を常に意識した、より包括的なアプローチを採用すること。

文献 (1)

Greenberg, J. et al., Evidence for Terror Management Theory: II. The Effects of Mortality Salience on Reactions to Those Who Threaten or Bolster the Cultural Worldview, *Journal of Personality and Social Psychology*, 58(2), 1990.

Emmons, R. A. and Paloutzian, R. F., The Psychology of Religion, *Annual Review of Psychology*, 54, 2003, pp. 377-402.

Goodman, L. M. (1981). *Death and the Creative Life: Conversations with Prominent Artists and Scientists*, New York: Springer.

Granqvist, P. and Kirkpatrick, L.A. (2008). Attachment and Religious Representations and Behavior. In Cassidy, J. and P. R. Shaver (eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications* (pp.906-933). New York: The Guilford Press.

Jonas, E. and Fischer, P. (2006). Terror Management and Religion: Evidence That Intrinsic Religiousness Mitigates Worldview Defense Following Mortality Salience, *Journal of Personality and Social Psychology*, 91(3), 553-567.

Kirkpatrick, L. A. and Shaver, P. R. (1992). An Attachment Theoretical Approach to Romantic Love and Religious Belief, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 266-275.

文献 (2)

Kirkpatrick, L. A. and Rowatt, W. C. (2002). Two Dimensions of Attachment to God and Their Relation to Affect, Religiosity, and Personal Constructs, *Journal for the Scientific Study of Religion*, 41(4), 637-651.

Pyszczynski, T., Solomon, S., and Greenberg, J. (2006/2003). *In the Wake of 9/11: The Psychology of Terror*, Washington, D.C.: American Psychological Association.

Reker, G. T. and Wong, P. T. P. (1988). Aging as an Individual Process: Toward a Theory of Personal Meaning. In Birren, J. E. and V. L. Bengtson (eds.), *Emergent Theories of Aging* (pp. 214-246), New York: Springer.

Stark, R. and Bainbridge, W. S. (1985). *The Future of Religion: Secularization, Revival and Cult Formation*, Berkeley: University of California Press.

Stark, R. and Bainbridge, W. S. (1996/1987). *A Theory of Religion*, New Brunswick: Rutgers University Press.

Vail III, K.E., Rothschild, Z.K., Weise, D.R., Solomon, S., Pyszczynski, T. and Greenberg, J. (2010). A Terror Management Analysis of the Psychological Functions of Religion, *Personality and Social Psychology Review*, 14(1), 84-94.

Wong, P. T. P., Reker, G. T. and Gesser, G., Death Attitude Profile-Revised: A Multidimensional Measure of Attitudes towards Death. In Neimeyer, R. A. (ed.), *Death Anxiety Handbook: Research, Instrumentation, and Application* (pp. 121-148), Washington, D.C.: Tylor and Francis, 1994.

文献 (3)

Wong, P.T. P., Spirituality, Meaning, and Successful Aging. In Wong, P.T.P. and Fry, P. S. (eds.), *The Human Quest for Meaning: A Handbook of Psychological Research and Clinical Applications* (pp. 359-394), Mahwah: Lawrence Elbaum Associates, 1998.

Wong, P. T. P. (2000). Meaning of Life and Meaning of Death in Successful Aging. In Tomer, A. (ed.), *Death Attitudes and the Older Adult: Theories, Concepts and Applications* (pp. 23-35), Philadelphia: Brunner-Routledge.

Wong, P. T. P., Meaning Making and the Positive Psychology of Death Acceptance, *International Journal of Existential Psychology and Psychotherapy*, 3(2), 2010.

Several white lines of varying lengths and angles are positioned in the bottom right corner of the slide, creating a modern, abstract graphic element.